
ノアレン物語(仮名)

帝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ノアレン物語（仮名）

【Nコード】

N0620Z

【作者名】

帝

【あらすじ】

もしアレンが始めからノアだったらというif物です。基本的には原作沿いで行きますが、処女作であり文才0であり見切り発車なので、いろいろ駄目な所が目立つかもしれませんが完結を目指して頑張りたいと思っています。

第一夜 始まりと出発（前書き）

プロローグ的な話です。かなり短めになっています。

第一夜 始まりと出発

インドの何処かの家の中、頭に大きなタンコブをつくって倒れている老人…いや白髪アレン・ウォーカーの少年とポツチャリとした体系でシルクハットに尖った耳、大きな口が特徴的な不思議な男千年伯爵がいた。

「起きテ、起きてください、アレン。」

「んっ…あれ？ここは？僕はいつたい…」

「クロスに殴られて気絶してたんですヨ。大丈夫ですカ？」

心配そうに尋ねる千年伯爵に、アレンは自身の状況を思い出し大丈夫と微笑んだ。

「三年間お疲れ様でした。次は教団への潜入ですが、紹介状の件もあるデ暫く休んで下さい。久々にキャメロット邸でお茶でもしますカ？ロードも喜びますヨ。」

“ロード・キャメロット”ロードメモリー夢の記憶を持つノアの長子。アレン大好き娘。クロスの所為で会う機会が少ない為人形遊びやティキいじりが激しくなってきたている。

「いや、クロスと一緒にだった所為で体が鈍ってきたからリハビリも兼ねて観光でもするよ。」

「そうですカ、ロードがまた癪癪を起こしちゃいそうですけど。」

「折をみて会いにくから、それまではティキに推しつけといて。」

伯爵はティキぽん。と小さく呟き同情の涙を流した。

“ティキ・ミック”^{ジョイド} 快樂の記憶を持つノア。^{メモリー} カードが好きで最初はアレンに教える側だったが、クロスの所為？でアレンの腕が上がり、負越しているため逆らえないのである。

「コホン、では吾輩はそろそろお暇しますネ。」

「うん…千年公、またね。」

「はい。また。」

別れを告げて一人になったあとアレンは旅立ちの準備に取りかかった。

第一夜 始まりと出発（後書き）

アレン出発。教団へは1、2話後に着く予定です。
感想待ってます。

第二夜 悲劇と喜劇（前編）（前書き）

一話に纏めようかと思っていたんですが、無理でした。

自分の文才の無さが憎いです。（T T）

第二夜 悲劇と喜劇（前編）

「お世話になりました。」

「いやいや、こちらこそ礼を言つよ。君さえ良ければこのまま団員になって欲しいくらいだ。」

「僕は元ですから、皆さんもあれくらいならすぐ出来る様になりますよ。」

「君にそう言つて貰えると有り難いよ。また何かあつたら言つてくれ。喜んで協力するよ。」

「ありがとう。道中気を付けて。」

振つていた手を下ろしてこれからどうするかを考える。

さつきまで話をしていたのはヒッチハイクで捕まえてこの街まで送つてもらつたサーカス団の団長。

乗せてもらう代わりにジャグリングや玉乗りを少し教えただけなんだけど随分気に入られたみたいだ。

僕はテキ程じゃないけど人間は嫌いじゃない……“白い僕”も嫌いじゃない、の方が正しいかな。

そんなことを考えていると裏路地の方から「アクマだー！！！！！」と叫ぶ声が聞こえてきた。

この世にはアクマといえは2種類が挙げられる。

一般的なのは抽象的な空想の悪魔、もう一つが僕たちの兵器であるAKUMA。

無視することも出来るけど、急いでる訳でもなく興味もあるので行

ってみることにしよう。

くアレン移動中く

声のした方へ行ってみると人ばかりが出来ていた。

騒いでいたのは、ジャンという少年のらしい。

周りの大人たちはイタズラだと判断しているが、どうやら事実のようだ。

アクマはこの世界を侵食し始めている。

ホームレスがハット帽をかぶったゴツイ奴に殺された。

アクマの骨組みが死体の体内に入った。

AKUMAなのは僕からは丸分かりだけど、千年公…姿見られたんだ。

あつ、AKUMAが上手いこと言って集まっていた人達が帰っていた。

さて、どうしようか？

↓助ける

見守る

立ち去る

うん、AKUMAの情報の出処も知りたいし、何より千年公のこと見られちゃったみたいだから出来るだけ情報を聞き出してから殺るか。

ウン

僕はイノセンスを発動させAKUMAの顔に傷を入れて、『自爆し

る』と命令を飛ばして破壊する。

吹き飛ぶ魂を見て思わず口元がすりあがりそうになるが、今はエクソシストとして振舞わないといけないから我慢して少年に話しかける。

ちなみに、このイノセンスは“破壊”の力で隠されし者やハートの影響は受けなくしてある。
アボクリフォス

「ジャンくん…だっけ？キミ、AKUMAのことやたら詳しくそうだけれど何者だい？」

「キャーーーーー！！！！」

ドカ

sideジャン

すげえ！すげえ！すげえ！ 本物だ。本物のエクソシスト。

親父の研究資料でAKUMAのことを知って、今まで“アイツ”と何度もパトロールに出かけた。

今はちよつと訳があつて一人で見回りを続けてたけど、初めて本物のAKUMAを見た。

「殺されるー」って言っても周りの大人たちは信じてくれなくて。

AKUMAの言うことを信じて行っちゃって。

もしかして俺、殺されるのか？って思ったけど助かった。

物凄いゴツイ腕でAKUMAを一撃で壊しちゃった。

多分あれが対AKUMA武器ってやつだ。

向こうも俺のことに興味を持ったみたいで家に来てくれるみたい。家に着くまでいろんなことを話した。

親父がヴァチカンの科学者で暇潰しに読んだ資料でAKUMAを知ったこと。

AKUMAを一瞬で消せるような兵器を造るすげー科学者になる夢のこと。

アレンには壊したAKUMAの数、対AKUMA武器の入手法、AKUMAを壊した時の気持ちを聴いたりした。

エクソシストってマツチヨのイメージあったから真逆で貧弱そうって言ったら凹んでたけど。

「ここが資料室だよ。全然帰って来ないからほとんど俺の部屋みたいな感じだけだね。」

「な、なんだか凄い部屋だね。」

「へへ。ね、アレン俺さ、千年伯爵の顔見たんだ。絶対あいつだよ。似顔絵書くからまってて。」

カキカキ

「ジャーン！こんなだったぜ。どう？こいつでしょ？」

俺が書き終わった絵をアレンに渡したとき。

ドンドン

「ジャンぼっちゃまー。お客様ですよー。」

タイミング悪いなあ。いつたい誰だろう？

…俺はこの時、もっとよく見ていれば良かったのかもしれない。
伯爵の似顔絵を見ている。アレンの……笑顔を。

第二夜 悲劇と喜劇（前編）（後書き）

後編はアレンがノアだけに原作とは少し外れます。

ジャン君の運命は如何に、って丸分かりですね。（・^ω^）

感想お待ちしてます。

第三夜 悲劇と喜劇（後編）（前書き）

後編スタートです。

第三夜 悲劇と喜劇（後編）

「レオ！よく来たな。久しぶりじゃん相棒。」

ジャンが嬉しそうに親友だったものに話しかけている。

僕は彼を通して手に持っている似顔絵を千年公に見せる。

特徴を捉えていて彼だとわかる。なかなか上手いな。僕ほどじゃないけど（おい

「ジャン。チョット来テホシイ所がアルンダケド。」

「え、でも。」

こつちを見て戸惑っている。

ここは後押ししておかないとね。

「行つておいでよ。僕はもう少し君のお父さんの研究資料を見てるからさ。」

それに、友達は大事にしくちゃね。」

「うん。でも、戻ってきたら居なくなつてたつてのはナシだからな。行こうぜレオ。」

「…あんな子供に見られるなんて、緩んでるんじゃないの千年公」

後ろに居る全体的に丸っこいメイドに言う。
向こうからの声は聞こえないけど、繋がってるから此方の声は届けられる。

「さてと、戻ってくる前に準備を終わらせようか。
ちゃんと・・は残しておくんだよ。」

「ハイ、ノアさま。」

返事をした瞬間、人だった物が異形の姿に変わる。

ジャンくん。AKUMAは何処にでもいるんだよ。何処にでもね。

side 千年公

やはり見られていたようですネ。

しかしアレンが此処に居てくれたとはウレシイ誤算でした。
ちよっと呆れられちゃいましたガ。

「おいレオ、来て欲しいとこって墓地？」

あ、もしかして母ちゃんの墓参りか。」

ウフフ、のんきですネエ。自分がこれからどうなるかも知らずー。

「それならそうと早く言えよ。水くさいな…。」

「こんばんワ。はじめまして、ジャンくん」

驚きつつ何か投げつけてきますたネ。痛くも痒くないですが。

「レオ逃げるぞ。おい、どうしたんだよ伯爵に殺されるぞ。レオ。」
無駄なことヲ。

「レオくんならもうとつくに死にましたヨ。お母さんのお葬式の日
にネ。」

それ…我輩を邪魔したお前を御仕置きするためのAKUMAです
ヨ。」

「うそだ。レオは俺の親友だ。^{ダチ}AKUMAなんかじゃない。」

予定通り逃げてしまいました力。しかしイイ顔になってきましたネ。
力もないのに正義にばかりに燃えてて我輩を悪者呼ばわりスル愚か
者。

AKUMAを生むのは人の心。醜い罪の結晶だというのニ。

side 三人称

ジャンはレオを引張りアレンの居る家へと向かっていく。

「ハア、ハア、ふざけんなよ。パトロールだって二人で始めたんだ。
AKUMAがどんな物かも、伯爵が悪者だって事も知ってた。
そんなレオがAKUMAのワケない。そうだろ、レオ。」

「モチロンダヨ。サツキはチョット足が竦んだダケダヨ。」

「へへ、そうだな。俺もちょつとびびったけど家まで行けば大丈夫だ。」

エクソシストが・・・アレンが伯爵を倒してくれるからさ。」

余裕が無いからなのか。

それとも心の隅でレオがAKUMAになってしまったと認めているからなのか。

一切振り返らずに走っていく。

どちらにせよ、今は走るしかない。

「やった。着いた……ぞ。」

やっこの思いで家のあった場所にたどり着く。
が、そこには家は無く。

目に映るのは瓦礫・ガレキ・がれきの山々。
つい先程まで家だったもの。

「な…なんだよコレ。母ちゃん、みんな、アレン。」

ガラッ

声に反応するかのように瓦礫の一部が動いた。

だが、そこにいた人間は全身に五芒星^{ペンタグラム}が浮かび砕け散っていった。

「今の…AKUMAの毒^{ウィルス}…。じゃあみんなAKUMAに…？」

ジャンの頭がパニックになる寸前、この状況で一番会いたいであろう少年の声が聞こえた。

「おかえり、ジャン。」

声に反応し一筋の希望を見出したかの様に向けた顔が、次の瞬間更なる恐怖に変わる。

「ア…レン？後ろのソレ…ナニ？」

アレンの後ろには父親の研究資料で見たボール型のAKUMAが控えるように存在していた。

更にその足元にはピクリとも動かない母親の姿。

「なにつて、AKUMAだよ。キミだって同じの連れてるじゃないか。」

「何…言っただよ。こいつはレオだ。AKUMAなんかじゃ…」

否定しようとしたが最後まで言うことは出来なかった。

なぜなら、レオだったものに銃口を押し付けられたからだ。

伯爵の言葉を信じたくなかった。

共に街を守ろうと約束した友を信じたかった。

だが現実は今として残酷なものだ。

「ジャン。キミに選択肢をあげよう。

後ろのAKUMAに殺されるか。^{レオ}

キミも母を呼んでAKUMAになるか。」

理解できない。理解したくない。それでも口から漏れる言葉。

「なんでだよ…アレンはエクソシストだろ…AKUMAを壊して、伯爵を倒すんだろ…？」

瞬間アレンの浮かべていた笑みが優しげな笑みから邪悪な笑みに変わる。

「エクソシストを名乗ってキミを助けたのは情報を得るためさ。AKUMAを壊す？伯爵を倒す？僕らは味方同士で争ったりしない。

で、どうする？死に方ぐらいは選ばせてあげる。」

まあ2択だけだね。

と続けるアレンの言葉は彼の頭入ってこない。
浮かんでくるのは怒り・悲しみなどの負の感情。

「ちくしょう、ちくしょう。ふざけんな、母ちゃんをAKUMAなんかに「ドンッ」……」

言い終える前にAKUMAによってジャンの頭が吹き飛ばされる。
残る身体が毒^{ウィルス}によって砕けたあと遅れて伯爵が現れた。

「オヤ、もう終わってました力。我輩が来るまで待っていてくれてもよかったの二。」

「大丈夫だよ千年公。メインはこれからさ。」

言いながらアレンは足元の女性…ジャンの母親を起こした。

「う…あ…だれか…」

「大丈夫ですか？今病院に連れて行きますから。」

目が覚めたのを見計らって、優しく声をかける。

「だれか…いるの…？お願い…私はいいからジャンを…息子を…」

「生き残ったのは貴女だけです。残念ながら…息子さんは…
しかし、方法が無いわけではありません。」

「方法…？ジャンを助けられるの？」

「はい。この魔道式ボディを使えば、死んだものを復活させることができます。」

ただし、それには貴女の協力が必要です。

ジャン君と一番近しかった。貴女の“呼び声”。」

「呼び声…わたしの呼び声で…あの子がかえってくる…」

ケガの影響か、息子を失ったショックか、ただただアレンの言葉を聞き入れる。

その顔には戸惑いや困惑などはない。ただ息子が戻ってくるという喜びだけ。

なんの躊躇も無く、目の前の骨組みに声をかける。愛しき息子。「ジャン」と。

直後、天から光が魔道式ボディに降り注ぎ、音を立てて動き出す。だがその骨組みが発した言葉は、感謝ではなかった。

「あ…あ…俺…AKUMAに…母ちゃん…なんで…」

ジャンの声で喋る骨組みからは悲しみしか伝わってこない。

「さあジャンくん。このあとキミなにをすべきかわかるだろう？」
の女を殺して被るんだ。」

「ギギギギ。」

一瞬の抵抗をみせるも、AKUMAは伯爵やノアには逆らうことのできない“兵器”

母を殺し通常では考えられない音を立てて人体に入っていく。

「Happy birthday to you dear ジャン 出来あがり。」

第三夜 悲劇と喜劇（後編）（後書き）

ジャンのアクマ化のお話でした。

なんだか終わり方が微妙な感じになってしまいました。（T T）

ジャン母はAKUMAを知らなかったというご都合設定です。

あと一話入れたら教団行く予定です。

第四夜 家族と一時（前書き）

一ヶ月近く間が空いてしまいました。

2011年中に出す予定だったのに（T T）

少し遅いですがあげましておめでとございますゝm（——）mゝ

そして相変わらずクオリティ低いです。

第四夜 家族と一時

キャメロット邸のロードの部屋。一際大きなベットのの上にはぐったりとしているがどこか幸せそうな顔で横になっているロードとベットのの上に座り込み優しくロードの頭を撫でているアレン。

観光を終えて久々にロードに会いに来て熱烈な“歓迎”を受け、途中から逆転したようだ。

コンコン

暫くしてロードが眠りについた頃を見計らったようにドアがノックされた。

「ロードは眠ったかい？」

「すみません。気を使わせちゃって」

「他でもない家族の為だからね。このくらいなんでもないさ。あとで部屋を用意するよ」

「ありがとう」

ぐいっ

アレンは礼を言いつつ立ち上がろうとするがロードに右手を掴まれていて動けなかった。

「ふむ、仕方ないね。今日は三人で寝よう」

ジャキツ

部屋に入ろうとする男に向かってイノセンスを銃刀型で発動させる。

「ははは、冗談、冗談だよ。さすがにソレは洒落にならないから…」

「鼻血噴き出しながらも言っても説得力ないんだけど」

「そこまで無防備なロードを見るのは初めてだね。ちょっと興奮してしまったよ」

「……………さつさと逝け変態」

冷やかな眼で左腕に力が込められる。今にも発射されそうだ。

「字が違うよ（汗、さすがに馬に蹴られる趣味は無いからね。おやすみアレン」

アレンは左腕を戻しドアが締め切られる寸前に声をかける。

「おやすみなさい。良い夢をシェリル」

“シェリル・キャメロット” デサイアスモリー 欲の記憶を持つノア。一言で表すと変態紳士。アレンにお父様と呼んで欲しいのと同時に、ロードを嫁に出したくないとも思っていて、日々葛藤している。アレンも養子にしようとした事もあるがロードの兄弟じゃなく恋人（夫婦）が良いと言う上目遣い＋涙目による“お願い”によって阻止されている。

（その時は出血多量で一週間ほど寝込んでいる。）

「おやすみ二人とも。……ああ、しかし名前呼びか。出来ればお父様と……いやいやしかし……」

ドアの前で葛藤し出したため数分後痺れを切らしたアレンに撃たれたことは言うまでもない。

翌日、キャメロット邸のテラスには5人のノアが集まっていた。

明らかに溶けきらないであろう大量の角砂糖をカップに入れてゆく千年伯爵。

手元の5枚のトランプを見つめるアレン・ティキ・シェリルの3名。

アレンに後ろから抱きついた状態でその3人を見つめるロード。

千年伯爵が最後の角砂糖をカップに入れた瞬間3人の手が動いた。

「スリーカード」

「フルハウス」

「ロイヤルストレートフラッシュ」

3人はポーカールールをしているようだ。

ちなみに役は上からティキ・シェリル・アレンの順。

「キャッホー」すごいよアレン。10連勝だよ」

現在アレンの全勝である。流石に一度も勝てないティキは今回のルールを確認する。

「なあ、今回はイカサマは無しだよな？」

そう、今回はイカサマは無しでやろうと事前に決めていたのだ。

「もちろん、ただ僕の後ろには勝利の女神がいるってだけだよ」

（ロードの前で負けるわけないだろ）

「そうだよな、悪いちょっと疑っちゃったよ」

（そっちがその気なら容赦しねえ。覚えたてのテクを披露してやる）

お互い考えていることは筒抜けである。まあそれだけ仲が良いということだろう。

数分後、結果は勿論アレンの全勝で終わった。

苦勞して覚えた業を全て看破されボロ負けしたティキはテーブルに突っ伏している。

シェリルの方は完全な遊び気分だったようでニコニコしている。

「さて、お遊びはここまでにして真面目な話をしようか」

「なにになに？ボクとの結婚のはなし？」

ロードが嬉しそうに言った瞬間シェリルの反応するが、アレンは片手で制しもう片手でロードの頭を撫でながら否定する。

「落ち着いて二人とも、それは真面目な話じゃなくて大事な話って言うんだよ」

「真面目な話ってもしかして任務のことか？」

いつの間にか復活いたティキが問う。

「うん、明後日には黒の教団に潜入を開始するよ」

アレンの言葉を聞き、全員の顔つきが変わる。

「そうですか、クロスと別れてから大分経ちましたシ良い頃ですね」

「でもこんなに間を空ける意味あったのか？」

すでにクロスと別れ（気絶させられ）てから数ヶ月経っている。

「意味はあるよ。簡単に言えばティムキャンピーのデータ編集だね」

“ティムキャンピー” ゴーレムの一種。

「ティムは教団にとってクロス元帥のゴーレムとして知られているだろうから、紹介状と併せて身分を証明するものになる。そしてヤ

「ッらは僕の過去…といってもクロスに会ってから教団までの間のことだけど、ソレを映像記憶で確認するだろうから、そのための観光だんたんだよ」

「ふゝん。でもティムはイイな。ねね、ボクもアレンに付いていきたい。体を人形に変えれば問題ないでしょ？」

「『ダメ』『ダメ』『ダメ』」

ロードの提案は直ぐ様却下される。

「今回のアレンの仕事はかなり危険です。イノセンスを持つているとはいえ相手はハートとハートへの唯一の手掛かり隠されし者、一筋縄にはいかないでシヨウ」

「そうだね、相手は僕らを殺す為なら何でもする悪魔なんだから」

「それにお前には表の生活と、もう少ししたら“舟”の引越し作業があるだろ」

「我慢しておくれロード。僕もアレンと会えなくなるのは寂しいけど今はそれぞれの役割を果たさなきゃならないんだ」

4人から言われ流石のロードも今回は折れることにした。

「ぶゝ、わかったよ。でもぜったいエクソシストの女に誑かされちゃダメだかね」

「大丈夫さ。僕はロード一筋なんだから…」

もつすぐ開幕のベルがなる……

第四夜 家族と一時（後書き）

今回はノア回でした。

シェリル少し早めのご登場です

ティムは原作でも良く分からない上喋らないので（アレンのゴールム）とだけ分かっていたればおｋみたいな扱いで行きます。

次回はやっと教団、初任務までいきたいなと思ってます。

登場人物設定（前書き）

ノアアレンの設定。

読んでも読まなくても特に問題ないです。

こんなの書いてる暇あるなら本編書けと思われるかもしれませんが
ご容赦ください。

登場人物設定

名前：アレン・ウォーカー

所属：ノアの一族（表向きは黒の教団）

性格：家族^{ノア}には基本的に優しく、人間・AKUMAには残忍

容姿：ノア化すると必ず黒髪になり左眼上の五亡星が消える。

ノア化せずとも変化可能でパーティーなどで使用する。その際は千年伯爵の息子として参加する。

武器：14番目のノアとしての“破壊”の力・左腕のイノセンス^{クラ}神^{ウシ・クラウン}ノ道化

趣味：AKUMAに内蔵された魂の観賞。

LVの高い汚染された魂やダークマターと共に消し飛ぶのが好き

イノセンス備考：イノセンスとしては半壊している。

ハート及びアポクリフォスの影響を受けない。

ヘブラスカが触れても壊れていないと感知されない。

イノセンスの意味？はない。

など似非神の力は持っているもののほぼ完全にノアアレンの腕である。

巨腕型・銃刀型・鎧型・大剣型と四形態を自在に使用可能。

外見を赤腕ではなく通常の腕に見せることも出来る。

登場人物設定（後書き）

完全な御都合設定です。ごめんなさいm（――）m
なるべく早く次話投稿する予定ではありますが、気長にお待ちいただ
けると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0620z/>

ノアレン物語(仮名)

2012年1月5日12時45分発行